

書評

David Owen 著
Nietzsche's »Genealogy of Morality«

岡村 俊史

1. 著者紹介および研究動向

本書の著者デイヴィッド・オーウェンは、現在イギリスのサザンプトン大学の社会・政治哲学講座で教鞭をとる社会・政治哲学者である。主にフリードリッヒ・ニーチェ、ミシェル・フーコーらの哲学の研究を通して社会・政治哲学的問題に取り組んでいる。本書は、そのタイトルが表す通り、ニーチェの『道徳の系譜』（以下『系譜』と略記）というテキストについてのコメントリーである。

オーウェンが本書を出版した学問的背景には、政治哲学の文脈でのニーチェ研究の隆盛がある。第二次大戦後長らく「ニーチェと政治」というテーマは人気のないものであった。もちろん、早い時期からニーチェ研究者によるニーチェの非ナチ化は行われてきた。しかし、それらはほとんど「力への意志」概念を脱政治化し「自己修練・自己創造への意志」へと読み換えるタイプの解釈であって、ニーチェ哲学から積極的な政治哲学的含意を取り出すという作業は依然として敬遠され続けてきた。だが、こうした状況も徐々に変わり、ニーチェの政治哲学を主題的に取り上げる研究も現れ始めた。近年では、ニーチェ研究者ではない政治哲学者や政治学者が研究対象としてニーチェのテキストを取り上げることも珍しくなくなり、今やニーチェはホブズ、ロック、ルソー、マルクスらと並んで政治哲学の文脈でも古典のうちに数え入れられるようになったとさえ言える（とりわけ、ウィリアム・コノリーをはじめとする「左派ニーチェ」グループは、自身の「ラディカル・デモクラシー」「アゴニスティック・デモクラシー」というアイデアの源泉をニーチェの内に見ている）。

こうした政治哲学的文脈におけるニーチェ解釈では、とくに『系譜』がメインテキストとして取り上げられることが多い¹⁾。その理由としては、まず、アフォリズム集、パンフレット、自伝といったスタイルの他のテキストと違い、道徳という統一したテーマについてレトリックを抑えた文章で書かれた（ニーチェにしては）珍しいテキストである、という形式上の理由があるだろ

う。だが、より本質的な理由は、このテキストが採用する「系譜学genealogy」という方法にこそある。『系譜』はそのタイトルが表すとおり、「道徳」という対象に「系譜学」という方法を適用したものである。この方法は、後にフーコーらによって実践されるように、様々な文化的対象へと適用可能な文化研究（とりわけ批判的探求）の方法であるのだが、この方法がはじめて意識的に用いられたのがニーチェの『系譜』なのである。オーウェンによる本書もこうした研究動向の中に位置づけられる。

2. 本書の内容

オーウェンは本書の論点として以下の四つを挙げている（p.2）。第一に、ニーチェの「諸価値の再価値評価 re-evaluation of values」というプロジェクトの発展史を再構成する。第二に、そうした「再価値評価」プロジェクト構想の発展にともない、「系譜学」という方法がはじめてその必要性を認識され、要請されるようになった経緯を明らかにする。第三に、そうしたプロジェクトが最も成熟した形で展開されている『系譜』というテキストの一般的構造と実質的議論を分析する。第四に、批判的探求としての「系譜学」という方法を特徴づける。

二部構成の本書の第Ⅰ部では、中期から後期にかけてのニーチェ哲学の発展を追う。すなわち、ショーペンハウアーとパウル・レーの影響を克服することで、ニーチェの道徳批判が「道徳的価値の無価値化 devaluation」から「道徳的価値の再価値評価 re-evaluation」へと発展深化してゆき、ついには道徳の系譜学を含み込むようなかたちでの道徳の批判（道徳的価値の再価値評価）が構想される過程を再構成する。系譜学的批判として展開されるこうした再価値評価プロジェクトは「内在的批判 internal critique」の一種として理解される。「ニーチェは、現行の道徳的諸価値の価値を問うべき内的理由を我々に提供することによって、『道徳』を再価値評価しようとするのである」（p.6; cf. pp.70-72, 132-134）。上で挙げた第一と第二の論点はここで論じられる。第三の論点は続く第Ⅱ部で取り上げられる。第Ⅱ部では、『系譜』の具体的な議論の分析を通して、系譜学という方法が価値転換のうちで具体的にどう機能するのかが明らかにされる。以上の考察を踏まえて最後の結論部で、第四の論点、すなわち批判的探究の方法としての「系譜学」という特徴づけが行われる。

そこで取り出された「系譜学」とは、文化的対象（制度・システム、慣習、イデオロギー、概念的枠組み、など）に対して適用されるある種の歴史的説明である（p.6; pp.63-70; pp.150f.）。特徴的なのは、この方法はそ

の前提として一種の歴史的存在論（フーコーの言う「我々自身の歴史的-批判的存在論」）を採るといふ点である。この歴史的存在論は、あらゆる文化的対象を社会的・歴史的に構成されたものとみなす。つまり、系譜学が対象にする文化的構成物を、ある種の形式（制度、慣習など、文化を構成する要素のうちのハード面）がある仕方で解釈され意味を付与されたものとして捉え、そうした対象の歴史を、その都度常に既に存在していた形式に新たな解釈が与えられることによってこれまでとは異なる意味・目的が押し付けられる過程の連続として理解する。こうした枠組みのもとで理解される文化的対象は、様々な解釈によって意味を塗り重ねられた構成物なのである。「生存しているもの・何らかの仕方で発生したものは、より優勢な力によって繰り返し新たな見方で解釈され、新たに占有され、新たな効用へと作り変え向け直される。[...] このようにある『事物』、ある器官、ある慣習の歴史の全体は、絶えず新たに解釈・修正し直すプロセスを表す記号の途切れない連鎖でありうる」（『系譜』Ⅱ.12）。たとえば刑罰という例について、ニーチェはこう言う。「文化の極めて晩期の状況（たとえば今日のヨーロッパにおけるような）にあっては、『刑罰』という概念は実際のところもはや決してひとつの意味 *Einen Sinn* を表すのではなく、むしろ『いくつもの意味 *Sinnen*』を総合した全体を表すのである。刑罰というものの一般のこれまでの歴史、すなわち刑罰が極めて多様な目的へと利用されてきた歴史が、ついには一種の統一体として結晶化される。すなわち、解きほぐしがたく、分析しがたく、そして、強調されねばならないのだが、全く定義することができないような種類の統一体へと結晶化されるのである」（『系譜』Ⅱ.13）。系譜学とは、こうした歴史を通して偶然的な仕方で絡まりあった様々な力と意味を解きほぐし分析してゆく作業にほかならない。こうした歴史的存在論が支持しうるものであるとすれば、我々は系譜学という方法を、文化に対する〈批判的ポテンシャルを秘めた〉歴史的探求、つまり、〈現在の自己の偶然性および可能性についての自己認識としての〉文化研究として理解することができる。

3. 都市文化研究との関連

ニーチェ解釈に焦点を絞った本書でのオーウェンの議論は、こうした系譜学的方法が道徳の批判（再価値評価）のための手段として必要とされるのはなぜか、また実際に手段として機能しうるためにはどのような要件を満たす説明でなければならないのか、という点についてのニーチェの見解を概観するものであった。しかし、こ

の方法は、必ずしもニーチェの道徳批判のプロジェクトのための手段に尽きるものではない。実際、フーコーやレイモンド・ゴイスの仕事はこの系譜学という方法を継承・発展させ、様々な文化的対象に適用する試みであった²⁾。当然ながら、この方法は都市の文化現象へも適用しうるものである。

注

1. 実際、90年代半ば以降、コメンタリーだけでも以下のものが、
 - ・ Stegmaier, W. [1994] *Nietzsches »Genealogy der Moral«*, Darmstadt: Wiss. Buchgesellschaft
 - ・ Ridley, A. [1998] *Nietzsche's Conscience: Six Character Studies from the »Genealogy«*, Ithaca: Cornell U.P.
 - ・ Leiter, B. [2002] *Nietzsche on Morality*, London: Routledge
 - ・ Janaway, C. [2007] *Beyond Selflessness: Reading Nietzsche's »Genealogy«*, Oxford: Oxford U.P.
 - ・ Conway, D. [2008] *Nietzsche's »On the Genealogy of Morals«: A Reader's Guide*, Stocksfield: Continuum
 論文集としては以下のものが出版されている。
 - ・ Schacht, R. (ed.) [1994] *Nietzsche, Genealogy, Morality: Essays on Nietzsche's »On the Genealogy of Morals«*, Berkeley, California U.P.
 - ・ Höffe, O. (hrg.) [2004] *Friedrich Nietzsche, »Zur Genealogie der Moral«*, Berlin: Akademie Verlag
 - ・ Acampora, C. D. (ed.) [2006] *Nietzsche's »On the Genealogy of Morals«: Critical Essays*, Lanham, MD: Rowman & Littlefield
2. Foucault, M. [1975] *Surveiller et Punir*, Paris: Gallimard (田村俣訳『監獄の誕生』新潮社 1997) ; Geuss, R. [2001] *Public Goods, Private Goods*, Princeton: Princeton U.P. (Stocksfield: Acumen, 2007年, 179頁)